

後病理所見より重複癌と診断し得た。子宮内膜癌と大腸癌の合併1例は、子宮内膜癌の術後に腸閉塞となり精査中に大腸癌の診断がなされた。子宮頸癌と直腸癌の合併の1例については、子宮頸癌の精査中に直腸癌の診断が得られたが直腸癌がより進行しておりこの治療が優先となった。

これらの経験より当科においては、子宮内膜癌・頸癌の診断時には、進行期の診断のみならず同時性重複癌も念頭におきCT・MRI、さらには消化器系の精査を施行している。これら臨床における対応、対策についての考察を含めて報告する。

3) 高齢者の歯肉に発生した紡錘形細胞癌の1例

棟方 隆一・泉 健次 (新潟大学歯学部)
中島 民雄 (第一口腔外科)
棟方 隆一・朔 敬 (同 口腔病理)

1992年7月、80歳男性が下顎右側臼歯部歯肉の有茎性腫瘍を主訴に某病院歯科を受診し、生検で肉腫が疑われ、新潟大学第一口腔外科を紹介され、7月30日初診、同日入院した。口腔内に、右側下顎第二大臼歯遠心歯肉を基部とする約6×4×4cmの有茎性腫瘍をみとめ、同部より生検を施行。組織学的には大小不同の紡錘形の腫瘍細胞が錯走、増殖し特定の分化傾向を示さず、肉腫の疑いの診断を得た。腫瘍は著しい増大傾向を示し、8月7日下顎骨部分切除術を施行、病理組織学的診断は紡錘形細胞癌であった。また顎下リンパ節に転移のあることが確認された。術後、口腔内創部後方断端に腫瘍が出現し、生検で再発が確認され、放射線治療と化学療法とを開始。10月初旬までに口腔内の腫瘍は縮小したが肺炎を併発し、胸水細胞診の結果PAPクラスV。その後肺炎症状は増悪し、また腎機能の低下がみられ、10月18日呼吸不全にて全経過3ヶ月で死の転帰となった。

4) 口腔癌浸潤下顎骨における Tc-99m-MDP の集積：Autoradiography による検討

土持 眞・加藤 譲治 (日本歯科大学)
新 潟 歯 学 部
口 腔 第 二 外 科
前多 一雄 (同 歯科放射線)
片桐 正隆 (同 口腔病理)

骨シンチグラフィーは悪性腫瘍骨浸潤の診断に使用されている。しかしながら、Tc-99m リン酸化合物集積

の局在は病理組織学的には明かにされていない。今回は Tc-99m-MDP autoradiography (AR), macrocontact radiography (MCR), 各種通常染色法などから検討を行なった。下顎骨の切除を行なった口腔癌(下顎歯肉癌4例、口底癌1例)の5例を対象とした。術前に185 MBqの Tc-99m-MDP を静注した後、腫瘍切除標本より下顎骨を切離した。厚さ約800ミクロンの浸潤部位スライス切片を作製してARとMCRを行なった。また、スライス切片に隣接する切片のHE染色、アザン染色を行なった。Tc-99m-MDPの集積は浸潤腫瘍の周囲で増加しており、骨密度の低下した骨梁の部分であった。また反応性と考えられる骨膜骨新生部位にも帯状に集積増加が認められ、この部位は腫瘍の浸潤部位から離れており骨シンチグラフィーで顎骨浸潤範囲の判定をするうえで注意を要することが明らかとなった。

5) 超高齢口腔癌患者の臨床的検討

高田 真仁・新垣 晋 (新潟大学歯学部)
中島 民雄 (第一口腔外科)

1985年4月から1994年12月の9年9ヶ月間に当科を受診した80歳以上の口腔癌13症例について検討した。初診年齢は平均82歳9月で性別は男性4例、女性9例。1例は異時性の口腔癌多発症例(頬粘膜と上顎歯肉)であった。発生部位は下顎歯肉、舌が各4例、頬粘膜、上顎歯肉が各2例、口腔底、小唾液腺が各1例。11癌(10名)は組織学的に扁平上皮癌、他3癌は疣贅性癌、紡錘細胞癌、粘表皮癌が各1例であった。臨床病期についてはStage Iが5例、Stage IIが3例、Stage IVが6例であった。主たる治療として外科療法が行なわれたものは6名(7癌)、放射線療法は5名、2名は老人性痴呆症のため化学療法のみが行なわれた。外科療法を行なった症例は1名を除き現在生存しているが、行なえなかった症例の7名中6名は初診より1年以内に死亡した。今回、特に超高齢口腔癌患者としての臨床的特徴と治療法の選択について重点をおいて検討した。

6) 舌癌に対する術後照射

益子 典子・杉田 公
伊藤 猛・土田恵美子
末山 博男・酒井 邦夫 (新潟大学放射線科)

舌癌の術後照射を、術後舌照射と郭清術後頸部照射とに分けて検討し放射線治療の役割を評価した。1982年